



いつでも「ラチオ」でお茶をにごすことである。けれども、本訳書では、この一つの言葉に、「特質」「観点」「理性」「条理」「根拠」「論説」「概念」「理念」「意味」「性格」「種的特質」等々の訳語を準備せられ、それらを縦横に駆使して、適確な訳文をえようとしている。その努力にはただ敬服のほかはない。(ただ、怠慢な読者の一人として、あえて疑念をのべさせていただくとすれば、たとえば、Q. 10, a. 4, ad 2 において、*nunc temporis est idem subiecto in toto tempore, sed differens ratione* とある *ratio* を、「性格」と訳されたのは(本書181頁)、いかがなものであろうか。私などには、英訳に *aspect* とある方が、理解しやすかった。)

ところで、本書はさしあたり、現在の思想界に、どのように迎えられるだろうか。もちろん、これによって、忽ち、哲学界にトマス・ブームをつくり出すことができるとは、考えられないし、また訳者の方々が、そのような考えをもっておられると想像することは、大へんな失礼であろう。本書はむしろ、まじめなトマス研究者、あるいはそれを志す学生諸君が、あるいは概観を得るために通読し、あるいは原書の傍において、その理解を深め、または容易にするところに、最もその真価を発揮するのではあるまいか。序文に「この大著の、通読・参看に容易であると同時に、厳密な学術的要求に應える」と書かれているのは、この意味であろう。本書は全体として、この所期せられた目的を十分に達成していると思われる。

具体的にいえば、まずその訳文は、はなはだ明快流麗であって、他の学術翻訳書に、ほとんどその比を見ない、といていい。現に、私は原文を対照せずに通読してみたが、ほとんど渋滞することがなかった。ただ、若干の箇所、いささかパラフレーズに類するのではないかと疑った場合もあったが、それはかえって、ラテン原文と全く文脈を異にする日本語としても、充分読みやすいものにするための、異常な努力の、当然の結果であることが、ただちに明らかになった。

参看の便という点からいえば、たとえば註についても、参照箇所の指示、術語の解説、引用文の出所など、手もとにある若干の原典版や近代ヨーロッパ語訳書と比較して、見識のある取捨選択がなされている外、全く独自の指示や解説がなされており、ともに感服させられた。また、索引は、非常に便利であり、とくに、註解において解説のある言葉については、その箇所の指示があるのは、使用の便を倍加すると思われる。(ただ、研究者のために、ラテン語から探索できる索引形式があったら、と考えたのは、私の怠惰のしからしめるところかも知れない。)

以下、本訳書の偉大な意義を感じ、その公刊を心からの拍手をもって迎える者

の一人として、すでにのべさせていただいた2,3の希望やら疑念につけ加えて、訳者の方々に対する失礼をも顧みず、なお気づいた点を少々提出して、御教示を仰ぎたいと思う。

まず、本書が、おそらく近代思想の洗礼をうけた日本の知識階級を、読者に迎えるということ考えた場合、できるならば原書に対する解説がほしかったと思うのは、私だけだろうか。純粋な学術書としては、あるいは解説は不要であると考えられるかもしれない。しかし現在、日本語で書かれたトマス解説書が少なく、あっても入手困難であったりする現状では、こうした願いも、あながち贅沢でとはいえないだろう。ことに、このような大事業の遂行にたえる、立派な研究スタッフにこそ、それは十分に期待されうると思われるからである。

次に、細かい点で恐縮であるが、訳文について若干の疑念を提出してみたい。たとえば、Q. 4, a. 2, Resp. で “quidquid perfectionis est in effectu, oportet inveni in causa effectiva: vel secundum eandem rationem, si sit agens univocum, ut homo generat hominem; vel……” とあるところを、「およそ果において存在しているほどの如何なる完全性も、こうした果を産出する因においてすでに見出だされるのでなくてはならない。その際、因におけるこのような完全性は、時としては、果におけると同様の完全性なのであって、これは、すなわち、例えば人間が人間を生むというごとく、能動者が果と『種的特質』を同じくする同義的なものたる場合にほかならない。」と訳されている。(本訳書83頁) ここで “secundum eandem rationem” は、“agens univocum” にかけて訳されているようであるが、これはむしろその前の “perfectio” にかけて読む方が、分かりよいと思われる。また、同じ「問題」の第3異論解答で “ipsum esse sit perfectius quam vita, et ipsa vita quam ipsa sapientia si considerentur secundum quod distinguuntur ratione” とあるところの訳文は、「純粋に概念的にそれだけを切り離して考えても、存在そのものは生よりも完全度の高いものであり、生そのものは智そのよりも完全度の高いものなのである。」(本訳書85頁) となっているが、“si considerentur secundum quod distinguuntur ratione” は、むしろ、「概念的に区別されたものとして考察した場合」というような意味ではないだろうか。また、Q. 13, a. 1, Resp. で “hoc nomen homo exprimit sua significatione essentiam hominis secundum quod est.” は、『人間』という名称がその表示のはたらきによって人間の本質をそのあるがままに表出している」と訳されている。(本訳書261頁) しかし、この significatio は、あえて「表示のはたらき」とせず、単に「意味」でも、充分に通じ

るのではなからうか。また、同じ「問題」の第9項主文で、“*omnis forma in supposito singulari existens, per quod individuatur, communis est multis, vel secundum rem vel secundum rationem saltem*” の訳文は、「すべて『個別的な主体において在るところの、そしてこのことによって個別化されているごとき形相』は、ことがらの上で乃至はわずかに概念の上で多者に共通」(本訳書 299 頁)とある。“*saltem*” はしかし、「わずかに」ではなく、「少くとも」ではなからうか。

次に、註について。本文 18 頁につけられた註 44 は、「本問題第 9 項主文ならびに……」とあるが、これは第 8 項の誤植ではなからうか。同様のことが、註 200 (本文 84 頁)、註 205 (本文 86 頁) について疑われた。すなわち、前者が「前項主文を参照」となっているのは、むしろ「前項第 3 異論解答参照」、後者が「第 2—1 部第 2 問題第 5 項第 3 異論解答を参照」とあるのは、「第 2 異論解答」とした方が、私には分りよいように思われた。

最もむづかしい訳語の問題については、はじめにもふれたように、実によく注意が行きとどいていて、これ以上の完全性はほとんど期しえられないと思われる。ただ、初学者のためからいえば、重要な術語などの場合、若干の説明を与えて下されば、と思ったこともないではなかった。たとえば *comprehendere* を「把握する」、*apprehendere* を「捕捉する」と訳しておられるのは、まことに適切と思うが、この際、その意味の相異を一言、注意していただけるとさらによかったと思う。また、本文 17 頁の *architector* は、下級の工人から区別される意味で、こう呼ばれているのであるから、ただ「建築家」と訳されただけでは、文章の前後の意味が、原語の語源を知らないかぎり、明らかにならないのではないだろうか。また、同じところで、*judicare* は「判断する」となっているが、これは「判定する」あるいは「裁定する」などしたら、もっと意味がはっきりするようになっていた。

以上、気づいたまま、勝手なことを書いた。記者の方々の 10 数年にわたる御努力を、ろくろく原典を参照もせず通読しただけで、まことにおこがましい限りではあるが、これも本訳書がいやが上にも完全なものとして完結されるようにとの、微衷に出たものに他ならない。もって諒とされんことを。